

令和6年度病害虫発生予報第3号

令和6年6月1日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

5月30日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1か月（予報期間6月1日～6月30日）の天気は次のとおりです。

向こう1か月の気温はほぼ平年並の見込みですが、1週目の気温は冷涼な空気の影響を受けやすく低い一方、3～4週目の気温は暖かい空気に覆われやすく高いでしょう。向こう1か月の降水量及び日照時間はほぼ平年並の見込みです。

I 特に注意が必要な病害虫

【果樹】 ※予想される主な病害虫の発生時期及び発生量等は以下のとおりです。

*：今後発生時期を予想する

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
果樹全般	果樹カメムシ類	—	やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○5月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）への成虫誘殺数はやや多い。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □飛来状況は、地域やほ場、山間部に野生する餌（実）の量によって差があるので、夕方～夜間及び早朝に園を確認し、飛来状況に応じて地域ごとに一斉防除を行う。 □令和6年度病害虫防除所情報第1号「果樹カメムシ類の防除対策について」山梨県／病害虫防除所情報 (pref.yamanashi.jp)を参考に防除する。
ブドウ	べと病	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □曇雨天と低温が重なる気象状況では、発病が多くなる恐れがあるため、薬剤の散布間隔をあげないよう予防散布を徹底する。 □葉での発病が見られなくても果穂に発病が見られることもあるため、ほ場をよく観察する。 □発病した葉や果穂は伝染源になるため、見つけ次第除去する。天候不順が続く場合や発病が見られる場合は追加防除を行う。 □「Ⅲ 各病害虫対策」の項も参考とする。
	黒とう病	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発病した新梢や葉、および果穂は、伝染源となるため、見つけ次第取り除き、ほ場から持ち出し処分する。 □仕上げのカサかけ、袋かけは早期に行う。 □特にシャインマスカット等は本病に弱いので、定期的な予防散布に努める。 □ブドウ黒とう病防除マニュアル（令和5年12月発行）を参考に防除対策を行う。 □「Ⅲ 各病害虫対策」の項も参考とする。

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	晩腐病	*	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並であった。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□病原菌は、降雨により飛散するため、第1回ジベレリン処理後、直ちにロウ引きのカサかけを行う。</p> <p>□仕上げのカサかけ、袋かけは早期に行う。</p> <p>□ブドウ晩腐病防除マニュアル（令和6年3月発行）を参考に防除対策を行う。</p> <p>□「Ⅲ 各病害虫対策」の項も参考とする。</p>

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
オオタバコガ	—	やや多い	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市、笛吹市、鳴沢村）への誘殺数は多い。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□幼虫は果実や茎の内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場内をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努め、被害果を適切に処分する。</p> <p>□老齢幼虫は薬剤の効果が低いため、発生初期の防除を徹底する。</p>

オオタバコガのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

Ⅱ 各作物の病害虫発生予報

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	うどんこ病	—	平年並	<p>○近年、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□葉や果穂に発病するので、小豆大期の防除を徹底する。</p> <p>□特に湿度が高い日が続く場合に多発する恐れがあり、突発的に発生が見られるので、よくほ場を観察する。</p> <p>□風通しの悪い園や河川の近くのほ場で発生が多い。</p> <p>□特に発病しやすい欧州系品種では、果穂の発病状況をよく観察すること。</p>
	灰色かび病	—	平年並	<p>○近年、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□開花期に曇雨天が続く、花かすが落ちにくいと発生が多くなるため、花かす落としを徹底する。</p> <p>□発病した果穂は取り除き、適切に処分する。</p> <p>□落花直後の薬剤防除を徹底する。</p>

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	クビアカスカシバ	平年並	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□虫糞やヤニを目安に、被害の早期発見に努め、粗皮下に食入した幼虫を捕殺する。</p> <p>□カサかけ・袋かけ後に、薬剤を主幹部や主枝など太枝によくかかるように散布する。</p>
	チャノキロアザミウマ	平年並	平年並	<p>○5月下旬現在、黄色粘着トラップ（南アルプス市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□例年6月中旬頃から発生が多くなるので、薬剤防除を徹底する。</p> <p>□薬剤散布後できるだけ早く袋かけを行う。カサで管理する園では、新梢や副枝先端への寄生が多いので、薬剤がかかりやすくなるよう新梢管理を徹底し、カサかけ後は棚上散布を行う。</p>
モモ	せん孔細菌病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回調査ほ場における発病葉率は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□春型枝病斑（スプリングキャンカー）が見られる枝や発病した葉および幼果は速やかに除去し、できるだけ早く袋かけを行う。また、袋かけ終了まで薬剤防除を徹底する。</p> <p>□モモせん孔細菌病防除マニュアル（令和6年3月発行）を参考に防除対策を徹底する</p>
	黒星病	—	平年並	<p>○近年、防除が徹底されており、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□降雨が多いと発生が多くなるため、薬剤防除を徹底するとともに、早期に袋かけを行う。</p>
	モモハモグリガ	—	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□フェロモントラップデータを参考に、成虫発生期の防除を徹底する。</p> <p>□発生が多い場合は、薬剤を追加散布する。</p>

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ	リンゴ コカクモン ハマキ	平年並	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（笛吹市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□幼虫は葉を糸でつづって食害するため、巻き葉等の発生に注意する。</p> <p>□5月下旬から6月上旬は越冬世代成虫の発生時期にあたり、果実等への被害も出てくるため、この時期の防除を徹底する。</p>
	モモ シンクイガ	平年並	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□6月上旬から7月上旬は越冬世代成虫の発生盛期になるため、薬剤散布を徹底する。</p> <p>□除袋後の防除を徹底し、雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、薬剤の追加散布を行う。</p>
	モモノゴマカマラ ノメイガ	平年並	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□5月下旬から6月上旬は越冬世代成虫の発生盛期になるため、薬剤散布を徹底する。</p> <p>□除袋後の防除を徹底し、雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、薬剤の追加散布を行う。</p>
	シロキイロ アザミヤ	平年並	平年並	<p>○5月下旬現在、桃色粘着トラップ（韮崎市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□除袋後（着色初期）の防除を徹底する。</p> <p>□雑草が発生源になるので、除草を徹底する。</p>
スモモ	スモモ ヒメシンクイ	—	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□幼虫の食入を防止するため、薬剤散布を徹底する。</p> <p>□被害果は発生源となるため見つけ次第取り除き、土中に深く埋めるなど適切に処分する。</p> <p>□被害の多い園や晩生種では、交信かく乱剤（ナシヒメコン）を利用する。</p>

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ・スモモ・オウトウ	灰星病	平年並	平年並	<p>○近年、防除が徹底されており、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○開花期の花腐れの発生量は少なかった。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□収穫直前に降雨が続くと多発することがあるので、予防散布を徹底する。</p> <p>□被害果は、見つけ次第土中に埋めるなど適切に処分する。</p>

果樹カメムシのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/kajyukame.html>

もも、スモモ、ブドウのチョウ目害虫フェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏秋ナス	オオタバコガ	平年並	やや多い	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市、笛吹市、鳴沢村）への誘殺数は多い。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□幼虫は果実内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場内をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努め、被害果を適切に処分する。</p> <p>□老齢幼虫は薬剤の効果が高いため、発生初期の防除を徹底する。</p>
	ハスモンヨトウ	平年並	平年並～やや多い	<p>○5月下旬現在フェロモントラップ（甲府市、笛吹市）による誘殺数は一部地域で多い。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□老齢幼虫は薬剤の効果が高いため、発生初期の防除に重点を置く。</p>
	ハダニ類	並 (例年比)	並 (例年比)	<p>○5月下旬現在、現地ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏 秋 ナス	アザミウマ類	並 (例年比)	並 (例年比)	○5月下旬現在、現地ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。 □発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。
ス イ ー ト コ ー ン	オオタバコガ	—	やや多い	○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市、笛吹市、鳴沢村）への誘殺数は多い。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □雄穂及び絹糸の見え始めに薬剤防除を行う。 □老齢幼虫は薬剤の効果が高いため、発生初期の防除を徹底する。
	アワノメイガ	—	並 (例年比)	○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市）への誘殺数は例年並である。 ○5月下旬現在、巡回ほ場での発生量例年並である。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □雄穂及び絹糸の見え始めに薬剤防除を行う。 □被害雄穂は早期に切除する。
	ハダニ類	—	並 (前年比)	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は前年並である。 ○気温の上昇とともに発生量が増えるが、近年ハダニ類の発生が多いほ場がみられる。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避ける。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
	アブラムシ類	—	並 (前年比)	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は前年並である。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。

ハスモンヨトウ、オオタバコガ、アワノメイガのフェロモントラップの調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	葉かび病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して症状の有無を確認する。</p> <p>□すすかび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p> <p>□県内で効果の低下がみられる薬剤もあるため、防除薬剤は総合農業技術センター令和4年度成果情報「トマト葉かび病の抵抗性品種に感染する系統の発生および有効薬剤」 https://www.pref.yamanashi.jp/sounou-gjt/documents/r4_10_hakabi.pdfを参考に防除する。</p>
	すすかび病	—	並 (例年比)	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□葉かび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を利用する。</p>
	灰色かび病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。</p>
	黄化葉巻病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場では発生が見られていない。</p> <p>□媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。（コナジラミ類の欄参照）</p> <p>□発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて、コナジラミ類を死滅させてから施設外に持ち出し、土中に埋めるなど適切に処理する。</p> <p>□「Ⅲ 各病害虫対策」及び令和3年度病害虫防除所情報第4号「施設栽培トマトの黄化葉巻病対策について（半促成栽培）」（令和4年3月発行）も参考にする。 https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/documents/220322_jyuhoudai4gou.pdf</p>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	コジラミ類	—	平年並	<p>○5月下旬現在、黄色粘着トラップ（中央市）における成虫誘殺数は平年並である。</p> <p>○5月下旬現在、巡回ほ場ではほとんど発生が見られていない。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるためよく観察する。</p> <p>□開口部（天窗、側窓、換気扇口等）はすべて0.4mm目以下の防虫ネットで被覆し、出入り口は二重カーテンにするなど、侵入を防止するとともに、ネットの隙間や破れなどは直ちに補修する。</p> <p>□黄色粘着板が生長点付近にくるように設置し、定期的に誘殺状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□マルハナバチへの影響がない薬剤を選択する。</p> <p>□施設内外の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かきした茎葉は適切に処理する。</p> <p>□「Ⅲ 各病害虫対策」の項も参考とする。</p>
半促成キュウリ	べと病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、発生初期の防除を徹底し、発病した葉は除去して施設外に持ち出し処分する。</p>
	うどんこ病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・果実は除去して施設外に出し、処分する。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p>
	褐斑病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が高湿多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。</p> <p>□予防散布を徹底し、発病した葉は早期に除去して施設外に出し処分する。</p> <p>□一部薬剤に耐性菌が確認され、薬剤耐性の発達が懸念されるため、同一系統薬剤の連用を避ける。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成キュウリ	アブラムシ類	—	並 (前年比)	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温はほぼ平年並の見込みである。 □早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。
	ハダニ類	—	並 (例年比)	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
うどんこ病	—	平年並	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □早期発見に努め、発病した葉、花、果実は除去して施設外に出し、処分する。 □発生初期の防除を徹底する。 □剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。
ハダニ類	—	平年並	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
ハスモンヨトウ	平年並	平年並～ やや多い	○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市、笛吹市）への誘殺数は一部地域でやや多い。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □老齢幼虫は薬剤の効果が高いので若齢期の防除を徹底する。

ハスモンヨトウ、オオタバコガのフェロモントラップの調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
アサミウマ類	—	平年並	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。 □発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。
アブラムシ類	—	平年並	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。

【稲】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
いもち病 (苗)	—	平年並	○5月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。 □早期発見、早期防除に努める。 □育苗日数が長引かないよう適期に田植えを行う。 □発病苗は見つけ次第、処分する。
いもち病 (葉)	平年並	平年並	○5月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。 □補植用の置き苗は伝染源になることが多いため、不要になった置き苗は速やかに処分する。 □追肥にケイ酸質肥料を施用する。 □日照不足田、冷水かんがい田及び常発地帯では予防散布を行う。 □アメダスデータを用いた葉いもち発生予測モデル「BLASTAM」での感染好適日出現から7～10日後にいもち病が発生開始するため、状況に応じて防除を行う。
イネミズゾウムシ	—	平年並	○5月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 □6月上旬までに田植えをする場合は育苗箱施薬を必ず行う。 □育苗箱施薬をしなかったほ場で、成虫が2株当たり1頭以上認められた場合、早期に薬剤防除を行う。
イネドロオイムシ	平年並	平年並	○5月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 □中高冷地帯及び山付き地帯などの常発地帯では、発生状況に注意する。

水稻葉いもち発生予測モデル「BLASTAM」判定結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/blastam.html>

Ⅲ 各病害虫対策

【ブドウべと病の防除対策】

- (1) 新梢管理（芽かき、誘引、摘心等）により、棚面の明るさや風通しを確保し、葉・果穂に薬液が充分付着するようにする。
- (2) 曇雨天が続く年は、開花前から葉や花穂で発病し、その後多発する傾向があるため、管理作業と合わせ発病の有無を確認する。また発病した葉や果穂は、伝染源となるため、見つけ次第取り除き、ほ場から持ち出し処分する。
- (3) 散布間隔を10日以内とし予防散布に努める。散布予定日に降雨が予想される場合は、散布を延期せず、降雨前に散布する。
- (4) 散布後に降雨が続いたり、集中豪雨があった場合は防除効果が低下し、残効期間が短くなるため、散布間隔を短くする。
- (5) 薬液散布量を遵守し、十分散布する。
- (6) べと病防除剤の注意事項
 - ・天候不順が予想される場合や発病初期に、オロンディスウルトラ SC2,000倍またはジャストフィットフロアブル5,000倍をかけむらのないよう丁寧に散布する。周辺に立木類がある場合は飛散しないよう注意する。耐性菌の発生を防ぐため、連用を避け、どちらも年1回の使用とする。
 - ・べと病防除剤は立木類に作物登録がないものが多いため、飛散しないよう充分注意する。
 - ・オーソサイド水和剤80（使用回数は計3回まで）は、キウイフルーツの隣接園では飛散しないよう充分注意する。また、スモモに薬害が発生する恐れがあるため、隣接園では飛散に注意する。

【ブドウ黒とう病の防除対策】

- (1) 発病した新梢や葉、および果穂は、伝染源となるため、見つけ次第取り除き、ほ場から持ち出し処分する。
- (2) 特にシャインマスカット等は本病に弱いので、定期的な予防散布に努め、カナメフロアブル4,000倍またはパレード15フロアブル2,000倍を追加散布する。
- (3) 仕上げのカサ・袋かけを早期に行う。

【ブドウ晩腐病の防除対策】

- (1) ブドウ晩腐病菌は雨水に混じって飛散し、幼果に一次伝染する。特に梅雨期の伝染が多い。
- (2) 落花期以降のブドウの果穂は晩腐病に感染しやすくなるため、雨水を果穂（果房）に当てないように、第1回目ジベレリン処理後、直ちにデラウェア用のロウ引きカサをかける。
- (3) 仕上げのカサや袋をかけるまでは、天候不順に注意し、散布間隔をあけないよう薬剤防除を行う。散布量・薬剤使用回数を守り、かけむらがないよう丁寧に十分散布する。
- (4) 摘粒作業などが遅れる場合は、先に仕上げのカサをかける。出来るだけ袋かけ栽培を行い、袋は再利用せず、毎年新品を使用する。
- (5) 毎年発生の多い園では、簡易雨よけなどの施設導入も検討する。

【施設ブドウのハダニ類対策】

- (1) 例年、気温が高くなる時期から発生がみられる。発生は、スポット的に始まるので、発生初期を見逃さず防除を徹底する。
- (2) 発生が拡大してからの防除では発生を抑えることが困難であり、果実品質が低下するので発生初期に散布する。

【オウトウのオウトウショウジョウバエ防除対策】

- (1) 中・晩生種で被害が増加するため、果実の適期収穫に努める。特に加温ハウスや取り残した果実が多い園の隣接園では、発生が早まる。
- (2) 初期からの予防防除を徹底するとともに、収穫が長引く場合は追加防除を行う。
- (3) 被害果は土中に埋める等、適切に処分する。

【オウトウ褐色せん孔病防除対策】

- (1) 感染期となる収穫直後から定期的に防除を行う。
- (2) 収穫終了後は樹を雨にさらす前に、定期的な防除を開始する。なお、例年発生が多い園では8月以降も追加防除を行う。

【カキの落葉病類の防除対策】

- (1) 感染期間が5～7月と長期間にわたるため、落花後から定期的な予防散布を行う。
- (2) 感染期（5～7月）に降雨が多いと、秋以降の発生が多くなる。

【野菜 夏秋作付前の対策】

青枯病（夏秋ナス、夏秋トマト）、半身萎ちょう病（夏秋ナス、夏秋トマト）、つる割病（夏秋キュウリ）、土壌線虫等

- (1) 苗は抵抗性台木を用いる。また、ほ場は過湿を避けるため高畝にして排水対策を心がけるとともに、連作をさける。
- (2) 土壌中に残存している病原菌や害虫を死滅させるため、ほ場の土壌消毒を行う。

【野菜 施設栽培収穫終了後の対策】

トマト萎凋病、キュウリつる割病、イチゴ萎黄病、土壌線虫等

- (1) トマト、キュウリ、イチゴなど施設栽培収穫終了後の根、株、茎、葉等は翌作の土壌伝染性病害の発生原因になるので、早めに抜き取り施設から持ち出し、適切に処分する。
- (2) 前年発生の見られた施設では作付けを避け、輪作を行う。
- (3) 土壌中に残存している病原菌や土壌線虫等を死滅させるため、土壌消毒（薬剤処理や還元消毒、太陽熱消毒等）を行う。

【トマト黄化葉巻病、トマト黄化病の原因ウイルスを媒介する

コナジラミ類の防除対策について】

- (1) トマト黄化葉巻病、トマト黄化病はコナジラミ類がウイルスを媒介して引き起こされる。タバココナジラミは両者の、オンシツコナジラミは後者のウイルスを媒介する。
- (2) 半促成栽培終了後、残渣は完全に枯らして、付着したコナジラミ類を死滅させてから片付けを行う。
- (3) 施設を10日以上密閉し、高温による蒸し込みを行い、コナジラミ類を死滅させ、次作に持ち込まないように徹底する。

詳細については「トマト黄化葉巻病（半促成栽培版）」の防除対策
20200106oukahamakiboujosisinn.pdf (pref.yamanashi.jp)を参考にする。

【キュウリ褐斑病の対策】

カンタスドライフロアブル、ベルコートフロアブルでは一部で耐性菌が確認されているため、防除薬剤の選択に注意する。

【サツマイモ基腐病の対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の発生を防ぐため、以下の点に注意する。

- (1) 未発生ほ場で生産されたことを確認するなど健全な種苗を確保する。
- (2) 植え付け前の種苗消毒を行う。
- (3) 栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照する。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和4年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04a.pdf

【稲】

苗立枯病対策

苗立枯病は、主にリゾープス菌やピシウム菌、フザリウム菌、トリコデルマ菌などの糸状菌によって引き起こされる。以下の点に注意し、育苗期の防除を徹底する。

- (1) 育苗ハウス、床土及び育苗箱の消毒を徹底する。
- (2) 緑化期以降は昼間 25℃以上、夜間 10℃以下にならないよう、保湿資材の開閉はこまめに行う。
- (3) リゾープス菌による立枯病を防ぐため、べた積みは避ける。高温や多湿、過灌水は発病を助長するため注意する。

IV その他

【水田において使用する農薬の止水期間の遵守について】

- (1) 農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項を確認し、止水期間を7日間とする。また、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備に努める。
- (2) 水稻初期剤の使用時期は、移植または播種の7日前までであり、農薬の河川等への流出を防止するため、移植6日前以降には使用しないこと。

【農薬危害防止運動について】

6月から9月は「農薬危害防止運動」実施期間です。農薬を使用するときは次の事項に注意してください。

- (1) 毒物または劇物に該当する農薬だけでなく、すべての農薬について、安全な場所に施錠して保管するなど、保管管理には十分注意すること。
- (2) 農薬の調製または散布を行うときは、ゴム手袋、マスク等の防護装備を着用し、慎重に取り扱うこと。

(3) 農薬を散布するときは、事前に関係者に連絡し、隣接住宅等に被害を及ぼさないよう風向き等に充分注意すること。

(参考) 住宅地等における農薬使用について

農林水産省ホームページ http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/jutakuti/

(4) 水田において農薬を使用するときは、止水に関する注意事項を遵守し、河川の汚染の防止等、環境の保全に努めること。

(5) 使用残りの調製液や散布器具を洗浄した水の、河川や水路等への直接排水は極力避けること。

(6) 農薬やその希釈液、残渣等を飲食品の空容器等へ移し替えしないこと。

(7) 農薬の空容器、空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託するなど適切に行うこと。

・農薬使用者自身で、許可を受けた廃棄物処理業者に処理を委託する。

・JA等、地域共同で適正に回収処分する体制が確立しているところでは、当該システムにより処分する。

連 絡 先

山梨県病害虫防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病害虫防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病害虫写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>